

【 2016年を迎えて 】

寒さ厳しき折、皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。旧年中は格別なご高配を賜り、まことに有難く厚く御礼申し上げます。

本年も、より一層のご支援を賜りますよう、協会スタッフ選手一同心よりお願い申し上げます。

世界との差をつめていくには選手の日々のトレーニングと同じで指導者も日々の勉強が必要です。幸せなことに仕事柄全国からいろいろな年代のいろいろなチームが職場に来られますので、すごくいい勉強と刺激になっております。指導に正解はないと思いますし、正しい指導法があるのではなく、自分が正しいと思ったことをやり通し進んでいく事が大切とっております。監督やコーチの考え方を聞きするよりもそのチームのピッチ外での行動や選手をみれば伝わってきますし、いい選手・チームを作る指導者には共通点があります。自分自身も考え方を伝えようと毎回代表合宿で試行錯誤を繰り返しています。遠いところからお金、時間を使って参加しているのですから少しでも成長して帰ってほしいとっております。選手が成長できていないということは指導者も成長できていない、教えられていないということですので毎回反省することが多々あります。

昨年、高橋明先生の「障がい者スポーツの魅力と可能性」-パラリンピックを通して-講演会に参加させて頂きました。高橋先生はテレビではおみかけしていたのですが生では初めてであったという間に1時間が過ぎてもっとお話を聞きたい気持ちになりました。ここで勉強しました障がい者スポーツのことを多くの方々に知ってもらいたい思いから一部紹介をさせていただきます。

「2020年にオリンピック・パラリンピック開催地が東京に決まり、2011年8月に50年ぶりにスポーツ振興法が全面改正され、障がい者スポーツが厚生労働省から文部科学省に移管され環境は大きく変わろうとしています。国民の認知度は低く理解と得ていくのが大きな課題としてあります。障がい者スポーツはリハビリテーションを主目的にはじまったのですが、健康増進や社会参加意欲を助長の役割も担っております。

健常者のスポーツでも年齢や体格等によって用具やルールを工夫して行っています。例えばバレーボールですとネットの高さが違う、サッカーですとコート、ボールの大きさが違う、試合時間が違うなどです。目が見えない、耳が聞こえないということでも工夫すれば障害のある人もない人も一緒になって気軽にスポーツを楽しめる、スポーツだけでなく社会においても工夫することによりその国の文化になるようにと思い活動を続けています。「できないこと」へ視点を向けるよりも「できること」を見つける努力が大切です。デフリンピックやパラリンピックも不可能を可能に「Impossible(不可能)」から「I'm

possible(私ができる)」アスリートの「Disability(障がい)」に視点を向けるのではなく「Ability(能力)」に視点を向けて認めてもらっております。」

日本には公益財団法人日本サッカー協会とは別に障がい別に大きくわけて7つのサッカー団体（順不同）があります。

- ・ 日本脳性麻痺7人制サッカー協会

<http://jcpfa.jp/>

- ・ 一般社団法人日本電動車椅子サッカー協会

<http://www.web-jpfa.jp/index.html>

- ・ 日本アンプティサッカー協会

<http://j-afa.com/wp/>

- ・ 特定非営利活動法人日本ソーシャルフットボール協会

<http://jsfa-official.jp/index.html>

- ・ 日本知的障がい者サッカー連盟

<http://jffid.com/>

- ・ 特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会

<http://www.b-soccer.jp/>

- ・ 一般社団法人日本ろう者サッカー協会

<http://jdfa.jp/>



各組織ともスタッフの情熱で運営しておりますが、どのカテゴリーもアジアの壁は高く、世界大会への出場権をとるのは簡単ではありません。2020年に開催される東京パラリンピックを4年後に控え、JFA主導による障がい者サッカーの統括団体の創設に向けた動きがありますので横のつながりを強くしお互いに世界で戦っていければと強く思います。

